# 塩尻の文学

## 第３号
（明治のころ）

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。

文学にふれ、美しい塩尻を見つめてみましょう。

2008年6月10日

## 「杜（もり）の家」

### 吉江喬松

豪農だった塩尻市長畝（ながうね）の生家が舞台。四季の庭の移り変わりが描写されています。帰郷した主人公の孤独なこころや、明治の社会の変貌など。

---

四百年余も年を経た槻（けやき）が七本立囲んでいて、周囲は、松、杉などの古樹がとびとびに取り巻いて、塀の壊（くず）れかかった芝生の土手を繞（めぐ）らし、その土手の下には、細長い濠（ほり）がこれに沿うて掘られている。この槻の樹の杜（もり）の中に立っているのが、自分の生れた家である。

四月の初旬（はじめ）自分は祖母の病気を見舞うために家に帰った。

（中略）

---

吉江喬松（孤雁）（よしえたかまつ）
フランス文学者、詩人、評論家。1880～1940。塩尻市生まれ。早稲田大学英文科卒業後、矢野竜渓、国木田独歩らの近事画報社で「新古文林」の編集にあたります。1915（大正４）年、早稲田大学教授となり、1916（大正５）年、パリに留学。帰国後、文学部に仏文科を創設。フランス文学の紹介者となります。

## 「土 煙」

### 太田水穂

『原の駅（しゅく）』で三十年も人力車（くるま）をひく平作の話。貧しさから自暴自棄になり嫌われ者に。九里巾で命を終えます。さびしい風景の描写。

---

塩尻峠の披垂（なだれ）が平ったい陵（おか）になって、方三四里もあろうという原だ。松林は皆な伐（き）りはらわれて、所々に櫟（くぬぎ）の背低いのが閃々（ひらひら）しているばかり、後は茅萱（ちがや）や雑草がだだっ広く茫々している。二つの街道がこの原で交叉（ゆきちが）って草鞋（わらじ）穿（ば）きの旅人が群をなして通行（とお）る。東国を掛けての出稼人、越後からの鰤（ごまめ）売、各自（めいめい）生まれ故郷の風俗をして、 ―――― 中には同行五人と書いた菅笠（すげがさ）の善光寺詣りもあれば身延（みのぶ）妙蓮講と書いた笈（おいずる）の一連がある。

（中略）

---

## 「六翁（ろくじい）」

### 太田水穂

明治 20 年代、水穂が少年時代に生家に出入りしていた大工の六兵衛の、生きざまを描いています。方言での六翁との会話があたたかく感じます。

（中略）

『これはね、洗馬から来た大工さのお翁（じ）さんだぞよ』物を煮る手を休めて母がこういうのを不思議そうにじっと翁（じい）の顔を見ていた。『良い子供衆がありますねえ、いくつになります』『取って十三になりますわね』『それじゃ学校へ行っていますら』『ええ塩尻の高等へ行っていますが、遊んでばかりいましてねえ』母が言うと、そも待ちきれないといったように父は唇をもがもがさせて、『ええ、それでもこの間の試験で良くできたって、一番になってなあ』　　（中略）

## 「生い立ちの記（抄）」

### 太田水穂

水穂が幼少期から上京するまでの出来事を回想したものです。学生の頃の、将来へのあこがれや、新鮮なまなざしが興味深いです。自然描写が美しい。

（中略）

学校の窓からは北の方に松本平が見渡された。春の四、五月頃あの大きな平野がどんよりと霞んで、かすかに西の方を劃（かぎ）っている飛騨境の連山の雪が見えるのである。窓の高いところに聳（そび）えているその山々は自分の家からも、学校の窓からも見えていた。あれが穂高岳だ。あれが乗鞍岳である。あれが槍ヶ嶽、その北が蝶ヶ嶽、燕岳などと指ざしながら、それを自分の地理に付いている日本地図などと比較してみるのであった。

（中略）

太田水穂（おおたみずほ）

歌人、国文学者。1876～1955。塩尻市生まれ。本名貞一。信州大学教育学部卒業後、松本蟻ヶ崎高等学校の教師になります。窪田空穂と「この花会」を結成。1902（明治 35）年、歌集『つゆ艸』を発表。1905（明治 38）年、島木赤彦と「山上湖上」を刊行。1908（明治 41）年、日本歯科大学の倫理科教授になります。1915（大正 4）年、歌誌『潮音』を創刊し主宰になります。

## 「乗興記」
（じょうきょうき）

幸田露伴

明治 23 年 4 月、軽井沢～下諏訪～塩尻～木曽路を旅します。地元の歴史や文化・自然の描写と共に旅の様子がわかります。

（中略）

我らは誹諧師を尋ねてまわる行脚（あんぎゃ）男にもあらざれば、また例の荒神にて塩尻峠を超ゆ。寒気強く袷（あわせ）と単衣（ひとえもの）を重ねて着たるになお寒し。湖水はすでに早く融けたれど見渡す連山駒ヶ嶽の山脈一面雪なり、富士は雲ありしために見えず。登り登りて頂上に至れば浅間の祠あり、眺望実に妙なり。俗説に山中鹿之助はこの山中にて更科に養われしという峠を下りて、塩尻駅より馬車を傭（やと）うて桔梗が原を過ぐ。ここは武田小笠原の戦ありし地にて名高けれど、いっこう詰まらぬ景色なり。また何とやらいいし者に桔梗が原の道行ありたるように記憶せり。洗馬本山そろそろ良き景色となる、木曽十三宿の内なり。贄川を過ぎて奈良井に至る。（中略）

幸田露伴（こうだろはん）

小説家。1867～1947。東京都下谷生まれ。本名成行（しげゆき）。早くから滝沢馬琴・柳亭種彦を耽読。経書や仏典などを学ぶ一方菊池松軒の迎義塾に入ります。木曽を舞台にした短編小説『風流仏』で文壇へ。「五重塔」「運命」などの作品で文壇での地位を確立。尾崎紅葉と並び「紅露時代」を築きます。

## 「かけはしの記」

正岡子規

東京大学在学中の旅。上野～横川～軽井沢～川中島～松本～木曽へ。人々とのふれあいがあり、情緒的な作品です。

（中略）

早く木曽路に入らんことのみ急がれて原新田まで三里の道を馬車に縮めて洗馬までたどりつき饅頭にすき腹をこやして本山の玉木屋にやどる。ここの主婦我を何とか見けん短冊をもち来たりてお笠に書きつけたるようなものを書きて給われと謂う。いかなる都人に教えられてかといとにくし。本山を出で桜沢を過ぐればここぞ木曽の山入り、山のけしき水の有様はや尋常ならぬ粧いにうつつをぬかし桃源遠からずとひとり勇めば鳥の声も耳にたちてめずらし。途上口占（くちうら）　やさしくも　あやめさきけり　木曽の山

（中略）

## 「くだもの」

### 正岡子規

子規は果物が好きだったそうです。作品の中に「いちご」「桑の実」「苗代茱萸（なわしろぐみ）」などが出てきます。

（中略）

〇苗代茱萸（なわしろぐみ）を食いしこと　　同じ信州の旅行の時に道傍の家に苗代茱萸（なわしろぐみ）が真赤になっておるのを見て、余はほしくて堪（たま）らなくなった。駄菓子屋などを覗いてみても茱萸を売っているところはない。道で遊んでいる小さな児が茱萸を食いながら余の方を不思議そうに見ておるなども時々あった。木曽路へ入って贄川まで来た。ここは木曽第一の難所と聞こえたる鳥居峠の麓で名物蕨餅（わらびもち）を売っておるところである。余はそこの大きな茶店に休んだ。

（中略）

正岡子規（まさおかしき）
詩人、歌人。1867～1902。愛媛県松山生まれ。本名常規（つねのり）。東京大学中退後、日本新聞社に入社。「日本」および区誌「ホトトギス」などにより、俳句や短歌の革新にとりくむ一方、写生文による文章革新運動を推進しました。

## 「乗合馬車」

### 窪田空穂

塩尻駅から洗馬まで乗合馬車に乗ります。馬車の御者との会話の中に明治の庶民の生活の様子が伺えます。

（中略）

爺はじっと眼を据えて、何か考えていたが、「旅にいると国のこと忘れる日はねえが、帰ってきてみると、根っからつまらねえ、一働く気もしねえな」「駅場（しゅくば）の様子は変わったろうね！」と私も尋ねた。「ああー」と言ったが、爺はその変遷を伝える適当な言葉が見つからないらしい。御者は聞こえないような風をしている。「旦那、東京にゃ自動車ってものができたってますがどうなりました」と御者は思い出したように聞く。「さあ、どうなったろう？何でも会社がいくつもできて競争中だとかいう噂だったが……」「高いもんですかい？」「そうね、……何でも四、五千円もするような噂だった……」「へえ」と御者は気のない返事をする。

（中略）

窪田空穂（くぼたうつぼ）
歌人、国文学者。1877～1967。松本市生まれ。本名通治。早稲田大学卒業後、新聞記者などを経て早稲田大学国文科教授になります。郷里で交わった太田水穂に刺激され作歌を始め、1902（明治 35）年、吉江喬松らと「山比古（やまびこ）」を創刊。

▲▼▲　図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも　▲▼▲

参考資料（塩尻市立図書館でお借りしました。）

・長野県文学全集　第Ⅰ期/小説編　第１巻　明治編　　郷土出版社
・長野県文学全集　第Ⅱ期/随筆・紀行・日記編　第１巻　明治編　郷土出版社
・長野県文学全集　第十巻　資料編　　郷土出版社
・吉江喬松全集　　第六巻　自然美論・散文詩・その他　　白水社

風景と人との関わりについて、考えさせられる詩に出会いました。誰でも風景の一部になっているのですよ…素敵ですね。

「或る風景　吉江喬松」

何人でも、己が姿を必然の點（点）景人物とした、或る特定の風景を、必ず持つてゐる。それは運命の繪巻であらう。その中では、彼は自分の小さな全身を、さらにその小さな後姿をさへ見ることができる。
その中へ身を置きさへすれば、何人でも心のなごむのを覺える。遠く誘ふやうな、魅するやうな、一種の力が、彼の全身をその畫面の中へすひこむでしまふ。
如何なる時にこのタブロオが出来上るのか、それは分らない。けれど、何人でも、必ずこの宿命のタブロオを脳裡に刻まれて持つてゐる。
それは、モンマルトルの丘の上に立つて、遠く眺めやつてゐる少女の前へも、汽車の腰掛に埋（うづま）つて、ぢつと前を見つめてゐる老人の前にも、また印度洋を通ふ汽船のデッキ・オフィサアの眼前へも、或は暖爐を圍んで、それぞれ黙つて坐つてゐる冬の夜の客人等の脳裡を抜け出して、それらの人々の前へも盡く浮び上る。
（中略）